

## Vākyapadīya II 研究 (1)

本 田 義 央

本研究は、インド文法家 (Vaiyākaraṇa)・言語哲学者であるバルトリハリ (Bhartr̥hari, ca A.D.450-510) の主著とされる Vākyapadīya (VP) 第 II 章 Vākyakāṇḍa の偈頌及びそれに対する11世紀の人とされるプンヤラージャ (Puṇyārāja) の注釈である Ṭīkā の日本語訳、そして、訳者自身の解説及びシノプシスとよりなる。

一般に、本論文で扱うこの書は、VP という名称で知られており<sup>1)</sup>、その名称のもとで各種刊本が刊行されている。しかしながら、この名称は現行刊本がひとまとまりとして扱う三つの章 (kāṇḍa) に対するものとして、確定的なものではない。本来は第 I 章と第 II 章のみが VP と呼ばれ、さらに第 III 章を含めて、Trikaṇḍī という別の名称で呼ばれていた、という説や、本来は第 II 章だけが、VP とよばれた、という説もあるからである。また、上述のように、VP は三つの章からなるのであるが、それら三つの章それぞれの呼び名についても、諸説がある。第 I 章が Brahmakāṇḍa もしくは Āgamasamuccaya、第 II 章が Vākyapadīya もしくは Vākyakāṇḍa、第 III 章が Padakāṇḍa、Prakīrṇakāṇḍa また Prakīrṇakāṇḍa と呼ばれている。この複数の呼び名が示すように、VP という全体に対する書名と同様に、この各章の名称も確定的なものではない。このような事情はあるが、現在一般に VP という名称で受入られているという理由により、便宜的にこれら三つの章を VP と呼ぶこととし、いわゆる Vākyakāṇḍa を VP 第 II 章 (VP II) として扱うこととする。

この書名、章立の問題以外に、さらに、注釈が問題をはらんでいる。このいわゆる VP II には、ここに翻訳を試みる Ṭīkā と呼ばれる注釈以外に、Vṛtti と呼ばれる注釈がある。この注釈がバルトリハリの自注であるか否かが一つの

論点となっている。また、Ṭikā の作者ブンヤラージャについても疑いが挟まれている。ここで述べた書名及び章の名称に関する問題、注釈者の問題については、Aklujkar [1993a] [1993b]、Potter [1990: 201] 及びそこに挙げられる諸論考を参照されたい。

上述のように、本研究は Ṭikā の翻訳、それに基づいた VP 本文の翻訳よりなる。しかし、議論の余地はあるとはいえ、それがバルトリハリの自注である可能性がある以上、本来なら、Ṭikā と同時に Vṛtti をも扱うべきであろう。しかしながら、Vṛtti の現行刊本の状態の悪さを見ると、また後に述べるように Ṭikā を含む翻訳研究がまとまったものとしては存しない現状を考えると、ひとまず、Ṭikā の翻訳を公表することは、VP 研究の上で意味のないものではないと考えられる。勿論、その際に Vṛtti をも可能な限り視野にいれることは、いうまでもないことである。Vṛtti の翻訳研究、その際にはテキスト校訂が不可欠の作業となると思われるが、とそれに従った本文翻訳研究は今後の課題としておきたい。

VP を題材とする研究、また、部分的な翻訳を含む研究は枚挙に暇がない。VP II 全体に対する先行する翻訳研究としては、Iyer [1977] と Pillai [1971] が存する。前者は偈頌の翻訳と注釈に基づいた解説（翻訳ではない）からなり、また巻頭に VP II 全体の梗概を含んでいる。後者は偈頌の翻訳と訳者の注記からなる。これらを随時参照し有益な助力を得た。

なお、今回とりあげることが出来たのは、VP II, kk.1-2 に対する Ṭikā の前半部分、つまり文定義 (vākyalakṣaṇa) の選択肢を扱う部分であり、文意 (vākyārtha) についての議論に入る直前までである。kk.1-2 に対する Ṭikā は、その著者自身が述べる通り<sup>2)</sup>、VP II 全体に対する導入及び概説である。その際に、ブンヤラージャは後続する偈頌を多数引用してこの章を素述している。それら引用偈頌の解説は基本的に該当箇所翻訳の際になすこととしたため、遺憾ながら参照箇所を挙げるに留めざるを得なかった。

#### 〈底本〉

VP には種々の刊本が存するが、詳細については AS47 [1993] の巻末に付

された文献一覧に網羅されているので参照されたい。本翻訳研究では偈頌に関しては現時点での批判的校訂本とみなされる下記リスト VP (1) (Rau版) を底本とし、その読みに従わない場合は注記の上、他の刊本により訂正を加える。また注釈に関しては VP (5) (Iyer 版) を底本とし、随時他の刊本を参照した。

[偈頌番号について] 本稿は VP の偈頌部分のみならず、Ṭikā の理解をめざすものであるから、偈頌番号は基本的に注釈付きの刊本、すなわち Iyer 版 (VP (5)) の偈頌番号に従う。Iyer 版と Rau 版の番号が異なる偈頌に関しては、Rau の略号のもと Rau 版の番号を併記することとする。

### 〈主要参考文献及び略号〉

[一次資料及び略号]

Ambākartrī : Raghunātha's *Ambākartrī*. (See VP)

Abhyankar : VP ed. by Abhyankar and Limaye. (See VP)

AS : *Asiatische Studien/Études Asiatiques*, Peter Lang.

I : VP ed. by Iyer (See VP)

KV : Vāmana and Jayāditya's *Kāśikāvṛtti* (a) Ed. by Aryendra Sharma and Khanderao Deshpande. 2 vols. Hyderabad, 1969-1970. (b) Ed. with Jinendrabuddhi's *Kāśikāvivarāṇapañjikā (Nyāsa)* and Haradatta's *Padamañjarī* by D.D. Shastri and K.P. Shukla. 6 vols. Varanasi, 1965-1967.

MBh : Patañjali's *Vyākaraṇa-Mahābhāṣya*. (a) Ed. by F. Kielhorn, rev. by K.V. Abhyankar. 3 vols. Poona, 1962, 1965, 1972. (b) Ed. with the *Pradīpa* and *Uddyota* by Vedavrata. 5 vols. Gurukul Jhajjar, 1962-1963.

NR : *Nyāyaratnākara*. (See ŚV)

Pāṭhabheda : Raghunātha, Śarmā, *Vākyapadīyapāṭhabhedanirṇayaḥ*. Sarasvatībhavanagranthamālā 116. Varanasi, 1980.

PCASS : Publications of the Centre of Advanced Study in Sanskrit, University of Poona.

Pillai : VP ed. and tr. by K.Raghavan Pillai. (See VP)

Puṇ : Puṇyarāja's Ṭikā (See VP)

Pradīpa : Kaiyaṭa's *Pradīpa* (See MBh)

Prameyasamgraha : *Vākyapadiyaprameyasamgraha, Ein Anonymes Scholion zum Zweiten Kāṇḍa des Vākyapadiya*. Ed. by Wilhelm Rau. München, 1981.

R : VP ed. by Pt.Raghunātha Śarmā. (See VP)

Rau : VP ed. by Wilhelm Rau. (See VP)

RauT : *Bhartr̥haris Vākyapadiya II, Text der Palmblatt-Handschrift Trivandrum S.N.532 (=A)*. Ed. by Wilhelm Rau. Stuttgart, 1990.

ŚV : Kumārila Bhaṭṭa's *Ślokaṅkārttika*. Ed. by S.V. Śāstri. Prāehyabharati series 10. Varanasi, 1978.

TB : Vācaspatimīśra's *Tattvabindu*. (1) Ed. by V.A. Ramaswami Sastri, Annamalai, 1936. (2) Ed. and tr. by M. Biardeau, Pondichéry, 1979.

Vṛtti : Vṛtti on VP (See VP)

VP : Bhartr̥hari's Vākyapadiya.

(1) Ed. by Wilhelm Rau : *Bhartr̥haris Vākyapadiya*. Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, Bd.42,4. Wiesbaden, 1977.

(2) Ed. by K.V.Abhyankar and V.P. Limaye : *Vākyapadiya of Śrī Bhartr̥hari*. Univ. of Poona Sanskrit and Prakrit Series II. Poona, 1965.

(3) Ed. and tr. by Ragavan Pillai : *The Vākyapadiya. Critical text of Cantos I and II*. Studies in the Vākyapadiya, vol.1. Delhi, 1971.

(4) Ed. by K.A.S. Iyer : *The Vākyapadiya of Bhartr̥hari, Kāṇḍa II with the commentary of Puṇyarāja and the ancient Vṛtti*. Delhi, 1983.

(5) Ed. by Pt. Raghunātha Śarmā : *Vākyapadiyam [part II] (Vākyakāṇḍa) by Bhartr̥hari with the Commentary of Puṇyarāja & Ambākartri. Sarasvatībhavanagranthamāla 91*. Varanasi, 1980.

vt : Kātyāyana's Vārtika (MBh 所収)

[二次資料]

Akljukar, Ashok

[1993a]: "An introduction to the study of Bharṭṛhari." AS 47 : 7-36.

[1993b]: "Once again on the authorship of the Trikāṇḍī-Vṛtti." AS 47 : 45-57.

Iyer, K.A.S.

[1969]: *Bharṭṛhari. A Study of the Vākapadiya in the light of the Ancient Commentaries.* Deccan College Building Centenary and Silver Jubilee Series 68. Poona.

[1977]: *The Vākyapadiya of Bharṭṛhari, Kāṇḍa II, English Translation with Exegetical Notes.* Delhi.

Joshi, S.D.

[1967]: *The Sphoṭanirṇaya (Chapter XIV of the Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra) of Kaṇḍa Bhaṭṭa.* PCASS C, No.2, Poona.

[1968]: *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya, Samarthāhnika (P 2.1.1).* PCASS C, No.3. Poona.

Joshi, S.D. and Roodbergen, J.A.F.

[1986]: *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya, Paspasāhnika.* PCASS C, No.25. Poona.

Potter, Karl H. (gen. ed.)

[1990]: *Encyclopedia of Indian Philosophies.* 5 vols. Delhi, 1984-1990. Vol.5 : *The Philosophy of the Grammarians*, ed. by Harold G. Coward and K. Kunjuni Raja.

Rāja, Kunjuni

[1963]: *The Indian Theories of Meaning.* The Adyar Library Series, vol.91. Madras.

Deshpande, M. Madhav

[1992]: *The Meaning of Nouns, Semantic Theory in Classical and Medieval*

*India, Nāmārtha-nirṇaya of Kauṇḍabhaṭṭa*. Kluwer Academic Publishers.  
Netherlands.

Palsule, G.B.

[1980]: “Bhartṛhari’s Concept of Vākya and Vākyaṛtha.” *Proceedings of the Winter Institute on Ancient Indian Theories on Sentence-Meaning (Held in March 1979)*. PCASS E, No.6. Poona.

井原照蓮

[1982]: 「インドにおける文法的考察の萌芽 — padapāṭha —」『成田山仏教  
研究所紀要』第7号

小川英世 [1991] 「パーニニ文法学派における文の意味」『前田頌寿記念佛教文  
化学論集』.543-562

川上真一 [1994] 「クマーリラの文意論」『南都仏教』第69号.57-82

### 〈Tīkā on VP II kk.1-2 シノプシス〉

#### 0. 第 II 章 導入

##### 0.1. 第 I 章のまとめ

##### 0.2. 第 II 章の主題提示

##### 1-2.0. kk.1-2 導入

[kk.1-2] 文定義①-⑧枚挙

##### 1-2.1 文定義①-⑧を不分割説・分割説に分類

##### 1-2.1.1. 不分割説 (akhaṇḍapakṣa) (①②③)

##### 1-2.1.2. 分割説 (khaṇḍapakṣa) (④⑤⑥⑦⑧)

##### 1-2.1.3. Ṛgvedaprātiśākhya (padaprakṛtiḥ saṁhitā) 引証

##### 1-2.2 各定義論述個所指摘

##### 1-2.2.1 ④ākhyāta (k.327)

##### 1-2.2.2 ⑥saṁghāta (kk.41-48)

##### 1-2.2.3 ①②③ (akhaṇḍapakṣa:vākya=sphoṭa) (kk.7-14, kk.19-27)

1-2.2.3.1 sphoṭa の分類

1-2.2.4 ⑤krama (kk.49-53)

1-2.2.5 ⑦ādyam padam (k.47), ⑧prthak sarvaṁ padaṁ sākāṅkṣam (k.48)

1-2.3.1 (1) 学術上 (pāribhāṣika) の定義 vt 9 及び vt 10 on P 2.1.1

1-2.3.2 (2) 世間的 (laukika) 定義 Mimāṃsāsūtra 2.1.46

1-2.3.3 (1) (2) の⑥ saṁghātapakṣa への分類

1-2.4 文定義総括

1-2.5 文意 (vākyārtha) は何か。

1-2.5.0 導入

1-2.5.1 ①②③ (akhaṇḍapakṣa) → pratibhā

1-2.5.2 ④ākhyātaśabda → kriyā

1-2.5.3 ⑤krama⑥saṁghāta → saṁsarga

1-2.5.4 ⑥の場合の別見解

1-2.5.5 ⑦ ādyam padam, ⑧ prthak sarvaṁ padaṁ sākāṅkṣam

1-2.5.6 別見解 artha = prayojana

1-2.5.7 文意に関する総括

1-2.6 abhihitānvaya/anvitābhidhāna

1-2.6.1 ④-⑥を abhihitānvaya/anvitābhidhāna に分類

1-2.6.2 直観知 (pratibhā) が文意である場合は abhihitānvaya/anvitābhidhāna  
のどちらにも関わらない

1-2.6.3 artha = prayojana の場合は abhihitānvaya

1-2.7 vidhi/niyoga/bhāvanā に関する文意不説明理由

1-2.8 仏教説

1-2.8.1 仏教説における文意

1-2.8.2 仏教説における文

1-2.9 ニャーヤ説

1-2.10 関係 (saṁbandha) の考察

1-2.11 kk.1-2 の総括

## 《翻訳》

[Puṇ 0]

[Puṇ 0.1]

## 【第 I 章のまとめ】

[Puṇ 0.1] [先行する第 I 章において] 以上のように、言葉 (śabda) の本質 (svarūpa) 等が、目的 (prayojana) とともに手みじかに確定された。そして、[そこでは] それ (śabda) が表示者 (vācaka) であることが、一般的に確定された。

[解説] ここで、Ṭikā が述べる目的 (prayojana) とは、VP I, kk.24-26 及び それに対する Vṛtti において列挙される VP の八つ主題の内の二つ、正しい言葉の知識とその使用によってもたらされるダルマ (dharma) と言葉の意味の理解 (pratyaya) をさしている。Iyer [1969 : 56-68] を参照されたい。

[Puṇ 0.2]

## 【第 II 章の主題提示】

そこで、[何が表示者である言葉 (vācakaśabda) であるかという点については] 見解の相違によって、[次の二つの説がある。]

「語 (pada) が表示者 (vācaka) である」と或る者達は [考え]、

「文 (vākya) [が表示者] である」と別の者達は [考える]。

したがって、[語が表示者であるという見解については第三章 Padakāṇḍa で取り扱うこととし] まずは、表示者にほかならない文 (vākya) それ自体 (svarūpa) について、敷衍して、[その] 本質を説明するために、第二章 (Vākyakāṇḍa) に着手する。

## [解説]

バルトリハリは、Palsule [1980]によって指摘されているように、‘śabda’を二義に用いている。ひとつは、いわゆる言葉・音声のことであり、今一つは、彼にとって表示者である文(vākya)をさす。言葉(śabda)が表示者(vācaka)である、ということが問題になるのは、このどちらの段階の śabda が表示者であるか、ということである。音声(varaṇa)なのか、単語(pada)なのか、それとも文(vākya)なのか。バルトリハリにとって、究極的には表示者(vācaka)は単一(eka)不可分(akhaṇḍa)な文(vākya)であるが、語(pada)も完全に排除されてしまうというわけではない。それらも、究極的には、非実在であるけれども、文法学という学術における概念的構想の段階としては、表示者なのである。

第I章において、言葉(śabda)が表示者(vācaka)であることは、一般的に確定された。しかしその段階で、表示者である言葉とは、語(pada)なのか文(vākya)なのか、という点については見解が統一されない。それぞれの見解を同時に論じることはできないから、語が表示者であるとする見解については、第III章(Padakaṇḍa もしくは Prakīrṇakakāṇḍa)において論じることとし、この第II章では、文を表示者と考える説を詳論するとブンヤラージャはこの章を導入しているわけである。

## [Puṇ 1-2.0]

まず、それ(vākya)に関する師匠達の見解の相違を根拠として、文(vākya) [の各種定義] を枚挙するために [Bhartṛhari は次の kk.1-2 を] 述べる。

[k.1] ākhyātaśabdaḥ saṁghāto\* jātiḥ saṁghātavartinī /<sup>3)</sup> eko 'navayavaḥ śabdaḥ kramo buddhyanusamhṛtiḥ // 1 //

\*Rau : ākhyātaṁ śabdasaṁghāto

Abhyankar, R, I : ākhyātaśabdaḥ saṁghāto,

RauT : ākhyātaś śabdasaṁghāto

Pāṭhabheda : ākhyātaḥ śabdaḥ

Pāṭhabheda : ākhyātaṃ śabdah

[k.2] padam ādyam pṛthak sarvaṃ padam sāpekṣam\* ity api / vākyam  
prati matir bhinnā bahudhā nyāyadarśinām // 2 //

\* Abhyankar, I, R : sākāṅkṣam

[kk. 1-2] 定動詞、[語] 集合、集合に存する普遍、単一無部分の言葉(śabda)、  
順序、知による統合、最初の語、[相互に] 期待を伴った全ての語それぞれ、  
というように、道理を知る者達の文(vākya)に関する見解は多様にわかる。

[Puṇ 1-2.1]

【文定義①-⑧を分割説・不分割説に分類】

[kk 1-2 に述べられている] これら八つが師匠達の文(vākya)に関する選  
択肢である。[これら八つは、分割説(khaṇḍapakṣa)・不分割説  
(akhaṇḍapakṣa)にそれぞれ次のように分類される。]

[Puṇ 1-2.1.1] 【akhaṇḍapakṣa】

[まず、] この不分割説においては、[次の] 三つが [文] 定義である。

①集合に存する普遍(jātiḥ saṃghātavartini)

《不分割説》②単一無部分の言葉(eko 'navayavaḥ śabdah)

③知による統合(buddhyanusāmṛti)

[Puṇ 1-2.1.2] 【khaṇḍapakṣa】

一方、分割説においては、[次の] 五つが [文] 定義である。

④定動詞(ākhyātaśabda)

⑤ [語の] 連続(krama)

〈分割説〉⑥ [語の] 集合 (saṃghāta)

⑦最初の語 (ādyam padam)

⑧期待を伴った全ての語それぞれ

(prthak sarvaṃ padaṃ sākāṅkṣam)

さらに、この [分割説に属する五つの見解の] 内、⑤連続と⑥集合は abhihitānvaya 説における二つの定義である。④定動詞、⑦最初の語、⑧相互に期待を伴った全ての語それぞれ、というのは anvitābhidhāna 説における三つの定義である。以上のように分類される。

[解説] KK.1.2 において、パルトリハリは8つの文定義を校挙する。それらをブンヤラージャは上記のように分割説と不分割説に整理する。そして、分割説に分類された5つは、更に anvitābhidhāna 説と abhihitānvaya 説とに分類される。anvitābhidhāna 説と abhihitānvaya 説は、周知のように、それぞれ Prabhākara 派と Bhāṭṭa 派が支持する文意表示に関する理論である。上記選択肢①-⑧の内、不分割説に基づく①から③の場合は、文がそれ自体単一無部分であると考えるのであるから、それを構成する語 (pada) による表示と文意の表示の関係は、真実には、問題とはならない。言い換えれば、anvitābhidhāna 説や abhihitānvaya 説がそれらに関して考慮されることはないのである。しかし、分割説においては、その表示方法に関して、見解の違いが生じる。これら諸説については、Ṭīkā on kk.1-2 後半で文意を論じる際に取り扱われているので、そこで論じることとする。

[Puṇ 1-2.1.3]

【Pratīśakhya 引証】

そして、ここで、“padaprakṛtiḥ saṃhitā” という Pratīśakhya [[の言明] がある。

## 【‘padaprakṛti’ 解釈】

【解釈 1. 「諸語の原因がサンヒターである」 |padānām prakṛtiḥ| (tatpuruṣa) : 不分割説】

ここにおいて、語の prakṛti つまり原因 (kāraṇa) が padaprakṛti であり、  
[それが] saṁhita である、というのが不分割説である。

【解釈 2. 「サンヒターは諸語を原因とする」 |padāni prakṛtir yasyāḥ sā| (bahuvrīhi) : 分割説】

一方、|padāni prakṛtir yasyāḥ sā| というように [解釈すれば] 分割説が現れる。

## 【解説】

ここで Ṭikā が引用する Prātiśakhya<sup>4)</sup> とほぼ同じ表現は R̥gvedaprātiśakhya 2.1 に見られる。但し、そこでは、逆の語順 (“saṁhita padaprakṛtiḥ”) である。kk.1-2 が掲げた文定義選択肢①-⑧を Ṭikā は不分割説・分割説にまず分類し、さらに分割説に分類された④-⑧については、anvitābhidhāna 説と abhihitānvaya 説に分類した。そして、分割・不分割の両説が、上記の “padaprakṛtiḥ saṁhita” という Prātiśakhya の文句の二通りの解釈から導きだされることを示し、分割・不分割の両説を補説しているのである。<sup>5)</sup>

ここで、Ṭikā が ‘padaprakṛti’ という複合語の解釈によって、分割・不分割の両説を説明するように、この Prātiśakhya の言明は、諸学派それぞれの見解にそうように、様々に解釈された。

なお、この Prātiśakhya の解釈の変遷については、井原照蓮 [1982 : 219] 注 (2) 及びそこに挙げられる諸論考を参照されたい。そこで井原氏は ‘padaprakṛtiḥ’ という複合語は bahuvrīhi に読むのが原意であろう、と述べ、さらに「後の時代になると、RP. のこの語は、その言語学説に相応じて、両様に読まれることになる。」と述べている。そして、目下の Ṭikā をその言語学説に相応せしめた例として引用している。また Deshpande [1992 : 10] もこのプラーティ

シャーキヤに言及し、上記の二つの解釈が生じた背景を簡潔に説明している。

[Puṅ 1-2.2.1]

【④ākhyāta】

それら [八選択肢] の内で、定動詞形(ākhyātaśabda)が文である [という見解] は、のちほど、言葉の意味の探究を論じるときに提示するであろう。つまり、[バルトリハリは次のように述べている。]

『ある定動詞形(ākhyātaśabda)に関して、限定された行為能成者(sādhana)が理解されるならば、それもまた意味が完結した一つの文であると理解される』(VP II k.327)<sup>7)</sup>

[解説] akhyāta とは、定動詞形(tinanta)、人称語尾(personal ending, tiṅ)、動詞語根(dhātu)のいずれをも意味しうるが、ここでは、定動詞形(tinanta)をさしていると考えられる。

[Puṅ 1-2.2.2]

【⑥saṃghāta = vākya 説】

『単独の語(pada)によって、意味が…』(VP II k.41)に始まる八つのシュローカによって⑥集合(saṃghāta)が文であると [いう見解が] 示されるであろう。<sup>8)</sup>

[Puṅ 1-2.2.3]

【akhaṇḍapakṣa (①②③) : vākya=sphoṭa】

[次に] 『全ての事象を照らしだす…』(VP II ,k.7)に始まり、『…まさに同じように、文中で ‘devadatta’などは意味をもたない。』(VP II ,k.14)<sup>9)</sup>に終る一連 [の偈頌] によって、さらに『顕現せしめられた言葉は…』(VP II ,k.19) 『…区分されるかのように理解される。』(VP II ,k.27)に終る [一連の偈頌] に<sup>10)</sup> よって、実に不分割説では、文(vākya)は sphoṭa を特徴とする言葉(śabda)である、ということが示されている。[MBh において次のように述

べられている。]

『発声されたXによって、頸下の垂肉、尻尾、背中のこぶ、蹄、角持つものという対象であるものが理解される、そのXが言葉 (śabda) である。』<sup>11)</sup>  
さらにまた

『言葉 (śabda) は sphoṭa であり、音声 (dhvani) は言葉の属性である。』(MBh on P 1.1.70)<sup>12)</sup>、[と述べられている。]

[Puṇ 1-2.2.3.1]

【sphoṭa の分類】

そして、sphoṭa は(1)外的(bāhya) (2)内的(ābhyantara)なものの二種である。外的な sphoṭa はさらに(1-1)普遍(1-2)個物の相違によって二種である。それらの内、普遍を特徴とする [sphoṭa] に関しては①集合に存する普遍と [いうように k.1 において枚挙され]、個物を特徴とする sphoṭa に関しては②単一無部分の言葉と [いうように枚挙され]、外的 [な sphoṭa] に関しては、③知による統合というように枚挙されている。

【解説】 ここで、Ṭikā は sphoṭa を(1)外的(2)内的の二通りに分類する。さらに、外的な sphoṭa は普遍と個物に分類される。したがって、ここでは、合計三種の sphoṭa が想定されていることとなる。そして、それらはそれぞれ、①②③の文選択肢に対応する。

[Puṇ 1-2.2.4]

【⑤krama】

『存在している特殊が…』(VP II, k.49)に始まり、『しかし śabdatva が共通である場合にも…』(VP II, k.53)で終る五つのシュローカで、⑤連続(krama)が文であることを述べるであろう。<sup>13)</sup>

[Puṇ 1-2.2.5]

【⑦adyam padam, ⑧prthaksarvam padam sākāṅkṣam】

『sādhana は…』(VP II, k.47) [と次の k.48 という] 二つのシュローカによって、[それぞれ] ⑦最初の語⑧相互に期待する全ての語それぞれ、という二つの [文] 定義を説明するであろう。<sup>14)</sup>

[Puṇ 1-2.3.1]

【学術上の定義】

[ところで] ヴァールッティカの作者に由来し (vārttikakāriya)、[文法学という] 学術 (śāstra) における専門的な (pāribhāṣika) 別の文定義もまた存在する。[すなわち]

『不変化詞 (avyaya)、行為参加者 (kāraḥ)、行為参加者に対する修飾語 (kāraḥaviśeṣaṇa) を伴った定動詞形 (ākhyāta) が文 (vākya) である。』(vt 9 on P 2.1.1)<sup>15)</sup>

及び

『一つの定動詞を含むものが [文である]』(vt 10 on P 2.1.1)<sup>16)</sup>  
[というものである。]<sup>17)</sup>

[Puṇ 1-2.3.2]

【世間的定義】

昔の (jarat) ミーマンサー学派の者が述べた世間的な (laukika) [文定義] もまた [存在する]。[即ち] 『意味の単一性に基づいて、文は単一である。分割の際に相互の期待があるならば。』(Mīmāṃsāsūtra 2.1.46)<sup>18)</sup>

[Puṇ 1.2.3.3]

【両定義の⑥集合説への分類】

それら双方 [の文定義] は、⑥集合説に含まれる。それらは、まっさきに『アクセントの脱落 (nighāta) 等の確定のために…』(VP II, k.3)<sup>19)</sup> で始まる [偈頌] によって考察されるであろう。

[Puṅ 1-2.4]

【文定義総括】

以上のように、文選択肢①-⑧が見解の相違によって生じる、と知られるべきである。

また Vṛtti において<sup>20)</sup>、『これは単なる例である。文定義の他のものをも示すであろう。』と彼によって<sup>21)</sup>述べられている。そ [の言明] は、[[Puṅ 1-2.3] にあげられた Vārttika の作者の手になる文定義等の包括を考慮しないで [そのように Vṛtti において述べられているのだ]、と考えられるべきである。[つまり、文定義①-⑧によって、選択肢は尽くされているのであるが、そのことを Vṛtti の作者は考慮していない。]

そして、[kk.1-2 において] 枚挙された文定義自体を、[kk.1-2 の] 記述に従って、以下において、諸偈頌そのものによって、示すであろう。

だから、ここでそれらを説明することは意味がない。

【解説】 この [Puṅ 1-2.3] の記述から、プンヤラージャは VP 本文の意図するところと、Vṛtti 作者の本文理解の間に齟齬を見出しているといえることができる。そして引用 Vṛtti 中の「文定義の他のもの」を [Puṅ 1-2.3] における Vārttika 等による定義と解することにより、プンヤラージャは両者の相違を吸収させているわけである。この点は本稿冒頭で述べた Vṛtti の著作者問題を扱う際のひとつの材料を提供しているといえるであろう。

〈注〉

- 1) 'Vākyapadīya' という書名は、KV on P 4.3.88 において、例 (udāharaṇa) としてあげられている。P 4.3.88 には先行規則 P 4.3.87 *adhikṛtya kṛte granthe //* からその全体が読み込まれる (*anuvṛtti*)。これらの規則に従うならば VP という名称は、*vākya* と *pada* からなる並列複合語 (*dvandva*) '*vākya-pada-*' に P 4.3.88 によって接辞 *cha* が導入されて派生される。したがって、この場合 '*Vākyapadīya*' という書名は「文 (*vākya*) と語 (*pada*) を主題とする (*adhikṛtya*) 書物 (*grantha*)」という意味となる。

- 2) シノプシス [1-2.11] 参照。

- 3) この偈には、本文中に示した異読が見られる。Rau は、'ākhyātam śabdasaṃghāto' の読みを採用しているが、翻訳に際しては、[Puṇ 1-2.1.1] に従って、'ākhyātaśabdaḥ saṃghāto' と読んだ。これは、I, R, Abhyankar 及び Pillai によっても支持される読みである。しかし、この二偈は、NR on ŚV, Vākyādhikaraṇa k.49 に引用されている。そこでは、k.1 は ab 句を 'ākhyātam śabdasaṃghāto' と読んでいる。つまり、Rau 版と一致する。ākhyāta は ākhyātaśabda と呼ばれ、どちらにしても意味に変化はないと考えられる。saṃghāta の場合もそれを「[語の] 集合」と理解する限り、śabdasaṃghāta であっても saṃghāta であっても大きな違いはないと思われる。
- 4) Pratiśākhyā はヴェーダの音声学書であり、各ヴェーダにそれぞれ付属する。
- 5) この Pratiśākhyā については、バルトリハリ自身が、次のように述べている。VP II, k.58 : padaprakṛtibhāvaś ca vṛttibhedena varṇyate / padānām saṃhitā yoniḥ saṃhitā vā padāśrayā //
- 6) 蛇足ながら、Deshpande[1992 : 10, (fn.25)]が示す *Nirukta* (Bhadkamkar's ed.) の頁数 p.23 は誤植。p.129 が正しい。
- 7) VP II .k.327 : ākhyātaśabde niyataṃ sādhanam yatra gamyate / tad apy ekam samāptārtham vākyam ity abhidhiyate //
- 8) VP II .kk.41-49 : kevalena padenārtho yāvān evābhidhiyate / vākyastham tāvato 'rthasya tad ahur abhidhāyakam //...
- 9) VP II, kk.7-14 : yathaika eva sarvārthaprakāśaḥ pravibhajyate / dṛṣyabhedānukāreṇa vākyārthāvagamāsa tathā //...
- 10) VP II , kk.19-27 : avyaktaḥ kramavāñ śabdaḥ upāśv ayam adhiyate/akramas tu vitatyeva buddhir yatrvātiṣṭhate //...
- 11) yenocāritena sāsnaṅgūlakhurakakudaviṣānyartharūpam pratipadyate sa śabdaḥ / これは、MBh on Paspāśāhnika の「Śabda とは何か」(kas tarhi śabdaḥ) という問に対する有名な答とほぼ同じ文である。ただし、MBh の原文では -viṣāṇinām saṃpraty-ayo bhavati sa śabdaḥ となっている。
- 12) MBh on P 1.1.70 : sphaṭaḥ śabdo dhvaniḥ śabdaguṇaḥ /
- 13) VP II, kk.49-53 : santa eva viśeṣā ye padārtheṣu vyavasthitāḥ / te kramād anugamyante na vākyam abhidhāyakam // ... // samāne 'pi tu śabdatve dṛṣṭaḥ saṃpratyayaḥ padāt / prativarṇam tv asau nāsti padasyārtham ato viduḥ /
- 14) VP II, kk.47-48 : niyataṃ sādhanam sādhyam kriyā niyatasādhanaḥ / sa saṃnidhānamātreṇa niyamaḥ saṃprakāśate // guṇabhāvena sākāñkṣam tatra nāma pravartate / sādhyatvena nimittāni kriyāpadam apekṣate //

- 15) akhyātaṁ sāvyayakāra-kaviśeṣaṇaṁ vākyam /  
 16) ekātiṁ /  
 17) この見解については、kk.4-6 で次のミーマーンサー説との対比の中で議論されることとなる。また、これら両定義の MBh に於ける解釈については、Joshi [1968 : 105-124] を参照されたい。  
 18) arthaikatvād ekam vākyam sākāṅkṣam ced vibhāge syāt /  
 19) VP II ,k.3 : nighātādivyavasthārthaṁ śāstre yat paribhāṣitam / sākāṅkṣāvayavaṁ tena na sarvaṁ tulyalakṣaṇam//  
 20) 目下の kk.1-2 に対する Vṛtti は現存しない。現行刊本において Vṛtti は k.13 に対する個所から始まる。  
 21) Vṛtti がバルトリハリの自注であるなら、「彼」はバルトリハリである。

(未完)

## A STUDY OF THE VĀKYAPADĪYA II (1)

Yoshichika HONDA

This paper consists of a Japanese translation of Bhartṛhari's *Vākyapadīya* (VP) chapter II (*Vākyakāṇḍa*) and that of Punyarāja's commentary on it called the *Ṭikā*, and my own brief notes.

The basic principle of Bhartṛhari's thought of language is that the sentence (*vākya*), which is single (*eka*) and indivisible (*akhaṇḍa*), is the primary linguistic fact. And its meaning is *pratibhā*.

His linguistic thought has great influence upon not only *vaiyākaraṇa* but also many scholars of the other schools in Indian Philosophy.

The following is a synopsis of the portions of the VP translated in this paper.

## 0.Introduction to VP II.

## 1-2.1. Introduction to kk.1-2

[kk.1-2] ④ *ākhyātaśabdaḥ* ⑥ *saṃghāto* ① *jātiḥ saṃghātavartinī* /  
 ② *eko 'navayavaḥ śabdaḥ* ⑤ *kramo* ③ *buddhyanusāmṛtiḥ* // 1 //  
 ⑦ *padam ādyam* ⑧ *prthak sarvaṃ padaṃ sāpekṣam ity api* /  
*vākyaṃ prati matir bhinnā bahudhā nyāyadarśinām* // 2 //  
 [Enumeration of eight views (①-⑧) on a sentence]

1-2.1 Classification of these views to *akhaṇḍapakṣa* (①②③) and *khaṇḍapakṣa* (④⑤⑥⑦⑧) on the basis of the two ways of interpretation of "pada-prakṛtiḥ sāmhitā" (*Ṛgprātisākhya* 2.1)

1-2.2 Pointing out the following *kārikā* in which each view is discussed.

1-2.2.1 ④ *ākhyāta* (k.327)

1-2.2.2 ⑥ *saṃghāta* (k.41-48)

1-2.2.3 *akhaṇḍapakṣa* (①②③) (kk.7-14, kk.19-27)

1-2.2.3.1 Classification of *sphoṭa*.

1-2.2.4.⑤ *krama* (kk.49-53)

1-2.2.5 ⑦ *ādyam padam*, (k.47), ⑧ *prthak sarvaṃ padaṃ sākāṅkṣam* (k.48)

1-2.3.1 (a) *śāstrīyalakṣaṇa* (*Vārttika* 9 and 10 on P 2.1.1)

1-2.3.2 (b) *laukikalakṣaṇa* (*Mīmāṃsāsūtra* 2.1.46)

1.2.3.3 (a) and (b) share ⑥ *saṃghātapakṣa*.

1-2.4 End of pointing out.